

## ローマ人への手紙16章 「労苦にある愛の結びつき」

### 1A 奉仕者の推薦 1-2

### 2A 教会の人々へのあいさつ 3-20

#### 1B ローマにいる人々 3-16

##### 1C パウロと共に労した人々 3-7

##### 2C 主にあって愛する人々 8-13

##### 3C 兄弟と姉妹たち 14-15

##### 4C 互いへの親愛と一致 16

#### 2B 分裂とつまずきをもたらす者たち 17-20

### 3A 宣教仲間からのあいさつ 21-27

#### 1B コリントにいる人々 21-24

#### 2B 頌栄 25-27

## 本文

ローマ人への手紙 16 章、最後の章を見ていきます。前もってお読みになった方は、どのように思われましたか？印象がどうですか？「よろしく」と名前の羅列で、つまらなかったかもしれません。けれども、そう思わないでください。むしろ、今まで、教えや勧めだけで、その背後にいる人々の顔が見えませんでしたね。今ここでようやく、生身の人々の姿を垣間見ることができるのです。今朝は、章全体を一節ずつ見ていきたいと思っています。

### 1A 奉仕者の推薦 1-2

<sup>1</sup> 私たちの姉妹で、ケンクレアにある教会の奉仕者であるフィベを、あなたがたに推薦します。

パウロは、この手紙を書いた後にローマの信徒たちに手紙を送らないといけませんね。今のうちに、郵便局があるわけではないですし、書留のように、重要な文書はなおさらの事、信頼できる人々に託します。その重要な役目を担ったのが、ここに書いているフィベという女性です。

パウロは初めに、「姉妹」と言っていますね。この章全体に貫かれているのは、パウロが、信仰の友を兄弟と呼び、また姉妹と呼ぶような、神の家族なのだということです。神の御霊によって生まれた、神の子どもでもあり、それで互いに兄弟姉妹になっています。イエス様は、肉の家族、母のマリアや兄弟たちがやって来て、イエス様を引き取りに来ようとした時に、「マルコ 3:34-35 ご自分の周りに座っている人たちを見回して言われた。「ご覧なさい。わたしの母、わたしの兄弟です。35 だれでも神のみこころを行う人、その人がわたしの兄弟、姉妹、母なのです。」とあります。みことばを聞いてそれを実践する人々の間には、肉の結びつきを超えた、新たな強い結びつきが出来て

いるということです。

そしてフィベは、「ケンクレアにある教会の奉仕者」とあります。ケンクレアとは、コリントの町に隣接する港町です。パウロが第二宣教旅行を終えた時に、ケンクレアで、誓願を立てていたので神を剃ったとありました(使徒 18:18)。私もギリシア旅行の時に行きましたが、コリントの遺跡からバスで 10 分ぐらい走ったところにありました。今も岸辺に、後世に建てられた教会の跡があります。

そこで、フィベは、「教会の奉仕者」でありました。奉仕者と訳されている言葉は、他の箇所では「執事」となっています(ピリピ 1:1 等)。彼女がケンクレアの教会で、物質面で、人々に仕える働きをしていました。教会において、牧師であるとか執事であるとか、役職のような名称があります。けれども、新約聖書では、役職が何であるか？というよりも、働きを実際に行っているかどうかで、その人が執事だ、とか、長老だ、とか後から呼ばれています。

パウロが、「あなたがたに推薦します。」と言っています。当時の教会は、私たちが思っている以上に、相互に頻繁の諸教会が関係を持っていたと考えられます。教会一つが、家の教会であることもあり、一つの建物に多くの人が入ることができません。ですから、使徒たちや預言者たち、伝道者たちは、巡回していることば多かったでしょうし、長老たちも複数で教会を治めていたこともあったでしょう。相互の関わりがありました。今でいうと、中国にある教会の様子に似ています。公の場所では人目につくため危険なので、比較的少人数の集まりがあります。牧者も一つの集まりだけでなく、複数で牧会し、監督し、また一つの集いに数人の長老や牧者がいることもあります。一個の教会ですべて完結していたのではないのです。

そこで、いろいろな人が今以上に行き交っていました。そこに偽教師たちもおり、気を付けなければいけませんでした。そこで推薦がとても重要な役目を果たします。だれがだれだか知らないといけいないので、パウロは強く彼女を推薦しているのです。

<sup>2</sup> どうか、聖徒にふさわしく、主にあって彼女を歓迎し、あなたがたの助けが必要であれば、どんなことでも助けてあげてください。彼女は、多くの人々の支援者で、私自身の支援者でもあるのです。

彼女がローマの教会で、軽んじられることのないように配慮しています。聖徒にふさわしく、というのは、旅人をもてなすように受け入れ、歓迎するということです(ヘブル 13:2)。そして、「主にあって」というのは、同じ主を信じている者なのだから、ということです。私たちの知らない人であっても、このように受け入れ、歓迎する姿勢が必要ですね。

そして、「支援者」だという言葉が出てきます。これは、宣教の働きをしている人々の生活や活動を、金銭的に大きく支援しているということです。フィベは貿易の商いで成功している人なのでしょ

うか。その収入を、パウロを含み宣教の働きをしている人々のために使い、労しているのです。また教会でも様々な雑用に、労し骨を砕いているのです。ですから、皆さんに知っていただきたいのは、私たちの教会はカルバリーチャペル・コスタメサの兄弟姉妹を同じように見てほしいのです。私たちのために、20年ぐらいずっと途絶えることなく、金銭的支援をし、また祈り続けてくださっているのです。そういった人々を認めていくことが必要です。

16章においては、労している人々へのあいさつが続きます。主にある働きで労苦しているからこそ、そこに愛の結びつきが生まれます。そして、愛の労苦によって、パウロが語っている教会の一致が生まれてくるのです。

## 2A 教会の人々へのあいさつ 3-20

### 1B ローマにいる人々 3-16

### 1C パウロと共に労した人々 3-7

<sup>3</sup> キリスト・イエスにある私の同労者、プリスカとアクラによろしく伝えてください。<sup>4a</sup> 二人は、私のいのちを救うために自分のいのちを危険にさらしてくれました。彼らには、私だけでなく、異邦人のすべての教会も感謝しています。

パウロは3節から7節までで、自分の宣教の働きと共にしていた人々で、ローマの教会にいる人々に挨拶しています。まだ一度も彼が行ったことのないローマですが、これら共に労していた人々がすでに、神のことばを教えています。ですから、パウロの宣べ伝える福音が何か異なる教えではなく、まさしく彼らが学んで知っている教えであることを、この挨拶は補強しています。

プリスカとアクラは、使徒の働きと手紙において六回も登場する夫婦です。コリントで会ったユダヤ人夫婦です。それからエペソにも共に向かい、彼らは留まり、パウロは後でエペソに入りました。

プリスカはプリスキラとも呼ばれる女性で、その夫がアクラです。二人はいつも一つになって動いていたようですが、プリスカがいろいろ前に出て奉仕をしていたのだと思われます。ところで、フィベもそうですし、プリスカもそうですし、パウロは女性の働きをこの章で多く書いています。パウロが、女性に対して、男性と同じように深い尊敬を払っていることを見ることができます。教会の中では、女性は男性と同じように奉仕することができます。唯一、女性が教会の中で出来ないのは、第一テモテ2章12節によると、男を教えて支配することです。文脈では教会の秩序のことを話しているので、けれども、祈ることも、預言することも、勧めをすることも、奉仕をすることも、みなすることができます。教会は、キリストにあって、男と女が一つになったところです。

こうした二人をパウロは、「同労者」と呼んでいます。主にあってともに労した仲間です。パウロが命の危険があった時に、彼らは決死の思いで、助けてくれたこともあります。こうした労苦の中で

パウロと二人の間には兄弟愛が生まれます。パウロは、他にも主にある同労者、主にあって労苦している人々の名前を挙げて、あいさつをしています。箴言には、「17:17 友はどんなときにも愛するもの。兄弟は苦難を分け合うために生まれる。」とあります。福音宣教のためにともに労することによって生じてくる愛があるのです。

痛みがあるからある結びつき、これは言葉で表現することが難しいです。福音宣教ではないですが、戦友においてそういった結びつきがあることが知られています TV ドラマにもなった小説「バンド・オブ・ブラザーズ」の中で、ドイツ軍と最善で戦った、米軍の空挺部隊の記録があります。仲間が次々と死傷していきました。その上官が、このようにまとめています。「これを生き抜いた者には、どこか隠れたところに傷を負っていた。おそらく、これが我が部隊を非常に強く結びつけたのに役立ったのだらう。」<sup>1</sup> 私たちは、傷を受けるのはもちろん嫌です。けれども、愛は傷を受けるリスクを負います。そしてその中で受けた傷によって、かえって結びつきが強くなるのです。

そしてパウロは、二人がユダヤ人でありながらも、異邦人の教会の人たちも感謝しているということを書き忘れていません。愛の労苦によって、キリストにあって、ユダヤ人と異邦人の壁というのは取り除かれているのです。

<sup>5a</sup> また彼らの家の教会によろしく伝えてください。

プリスキラとアクラは、コリントにおいても、エペソにおいても、そしてローマにおいても、自分の家を開放して、そこを教会にしていたようです。

ところでローマの町は、相当、過密な人口だったようです。今の東京や大阪の下町の密集地域のようなところだったと言われています。インストラと呼ばれるマンションがありました。アパートの一室ぐらいの広さしかなかったであろうと思われます。ですから、私たちが想像するような、一軒家が広くあってそこに何十人も集まっていた、ということではなく、数名とか十数名が所狭しと集まっていたと考えられます。

<sup>5b</sup> キリストに献げられたアジアの初穂である、私の愛するエパイネトによろしく。

このアジアは、今のトルコ、ローマのアジア属州のことです。エペソなどがあります。そこで、初めて救われた人の一人が、エパイネトです。彼の後に、次々とアジアで人々が救われて行きました。それだけに特別な人だったのでしょう。

---

<sup>1</sup> I'm not sure that anybody who lived through that one hasn't carried with him, in some hidden ways, the scars. Perhaps that is the factor that helps keep Easy men bonded so unusually close together. (Capt. Richard Winters) 「バンド・オブ・ブラザーズ」スティーヴン・アンブローズ著

エパイントは、この時はローマに移り住んでいたのですね。パウロがどのような働きをしてきたのか、人々は彼を通して知る事ができたでしょう。このように、かなりの行き来をそれぞれが行っていることが見て取れます。当時のローマを中心とする社会では、私たち首都圏に住む者たち以上にいろいろな行き来があったのではないかとと思われます。その中で私たちも励まされますね、こういった行き来によってそれぞれが強められ、互いに知り合いになることができるのです。

<sup>6</sup>あなたがたのために非常に労苦したマリアによろしく。

この労苦は、「疲弊するまで労働する」という意味です。マリアは、へとへとになるまで、ローマの聖徒のために労したようです。私たちはキリストの愛に駆り立てられるとき、自分を省みずに労して働くことがあります。

<sup>7</sup> 私の同胞で私とともに投獄されたアンドロニコとユニアによろしく。二人は使徒たちの間でよく知られており、また私より先にキリストにある者となりました。

アンドロニコとユニアは、パウロといっしょに投獄された人たちで、同じくユダヤ人です。そして、二人はエルサレムにおいてキリスト者となったのでしょう。パウロより先に信仰を持っています。そして、ユニアのほうは女性の名前です。「使徒たちの間でよく知られており」と書いてありますが、これは「よく知られた使徒たちの一人」と訳したほうが良いでしょう。つまり彼らは使徒であり、女使徒もいたということです。

使徒といっても、もちろん十二使徒ではありません。十二使徒は、彼らに与えられた権威によって教会が建て上げられ、新約聖書にもなっています。しかし、「使徒」という言葉自体には、何か特別な役職の意味はありません。「遣わされる」という意味です。ギリシア語で聖書を読むと、「遣わされる」という言葉は、「使徒とされた」と訳すことができるのです。例えば、バルナバも使徒でした。先ほどの「執事」も、具体的なことで奉仕をしていて、責任をもって行っているので「執事」となっているように、神によって遣わされ、イエス・キリストの名による権威をもって教会を建て上げる働きをしているのなら、使徒の賜物を持っていると言えるのです。今の宣教師が似ています。

ですから、女性たちも使徒の働きをすることができるほど、女性は教会で用いられていたのです。新たな宣教地を開拓する時に、女性の開拓者は宣教史において数多くいます。

### 20 主にあって愛する人々 8-13

ここまでが、おそらくパウロが宣教の旅で共に労した人々でありました。次は、もしかしたらまだあったことがないけれども、いろいろな手段で、人であったり、文書であったり、その人たちのことをたくさん聞いていて、それで愛情をもって挨拶していると考えられます。

<sup>8</sup> 主にあって私の愛するアンプリアトによろしく。<sup>9</sup> キリストにある私たちの同労者ウルバノと、私の愛するスタキスによろしく。<sup>10</sup> キリストにあって認められているアペレによろしく。アリストブロの家の人々によろしく。<sup>11</sup> 私の同胞ヘロディオンによろしく。ナルキソの家の主にある人々によろしく。<sup>12</sup> 主にあって労苦している、トリファイナとトリフォサによろしく。主にあって非常に労苦した愛するペルシスによろしく。<sup>13</sup> 主にあって選ばれた人ルフォスによろしく。また彼と私の母によろしく。

主にあって愛する、という言葉を繰り返し使っていますね。イエス様が命じられたように、ご自身が愛されたように、互いに愛し合いなさいという命令をパウロたちは実践していました。遠くにいる人々、一度も会ったことのない人々もこの中に含まれるのではないかと思います。それでも、数多くの関係が、遠隔でも結ばれていたようです。遠距離恋愛ならず、遠距離の交わりです。このようなことを思うと、当時のローマ社会が今のような SNS は当然、使っていなくとも、かなりの情報が飛び交うことのできるような環境があったのではないかと思います。私たちも、いろいろなつながりを、主にあって愛する人々と持つことができますね。

その他にここで気づくのは、アペレが「キリストにあって認められている」とあることです。この、認められているとは、さまざまな試験を通して、合格の証印をおされることを意味します。つまり、アペレは、本当のキリスト者であると太鼓判を押されていて、彼のことばと行いが人々に、彼が本当のキリスト者だと評判になっていたのでしょう。他に、先ほどと同じように、同労者、労苦している、非常に労苦したという言葉が連なっています。主にあって苦しみを受けた人々の間にある、愛の結びつきです。

それから、「アリストブロの家」「ナルキソの家」という言葉があります。注解書によると、アリストブロやナルキソは必ずしも信者ではないかもしれない。生きていないかもしれない。これはその家に仕えている奴隷たちのことかもしれない、というものがありません。ローマ社会は奴隷で成り立っていました。パウロは、手紙で奴隷に対する教えも行っているほどです。そういった人々が、主を信じて、主のために働いている人々も多かったものと思われます。

13 節の、「主において選ばれた人ルフォス」という表現は興味深いです。何をもって、選ばれたという言葉がパウロが使っているのか？ 神に愛され、憐れみを受けていることが、ルフォスを見ると明らかだったのかもしれませんが。パウロは彼とは深い付き合いがあったようです。彼の母を、自分の母と呼んでいます。パウロは彼の家にお世話になり、母はパウロを自分の息子と同じように親切にして愛してくれたのではないかと思います。

### 3C 兄弟と姉妹たち 14-15

<sup>14</sup> アシクリト、フレゴン、ヘルメス、パトロバ、ヘルマス、および彼らとともにいる兄弟たちによろしく。<sup>15</sup> フィロロゴとユリア、ネレウスとその姉妹、またオリンパ、および彼らとともにいるすべての聖

徒たちによろしく。

パウロは、男性たちを兄弟たちと呼び、女性たちを姉妹たちと呼んでいます。神の家族です。そして、「彼らとともにいるすべての聖徒たちに」と言っています。彼らはおそらく指導的な働きをしていたのではないかと思います。その働きの中にいるすべての聖徒と言っているのでしょう。聖徒とは、聖別され神のものとなった人々です。信じた人すべてです。

#### 4C 互いへの親愛と一致 16

<sup>16</sup> あなたがたは聖なる口づけをもって互いにあいさつを交わしなさい。すべてのキリストの教会が、あなたがたによろしくと言っています。

口づけは、もちろん、その地域においてあいさつとして行なっています。聖なる口づけとは、主にあってあいさつをする、信仰を持っている者だから親愛なる情を抱くということです。今見てきたように、主にあって抱いている兄弟愛に裏付けされたています。私たちが単に、聖書を学ぶために教会に来るだけでは身につけることはできません。主にあって共に労していることが必要なのです。そうした進んでともに労し、そしてその中に、互いのあいさつを交わすことができるのです。

それから、「すべてのキリストの教会が」と言っていますが、これはアジア、マケドニア、アカイカにいるすべての教会です。アドリア海を経て、イタリア半島にいるローマの信者たちに対して、パウロが宣教の旅で信じて行ったすべての教会があいさつをしている、ということです。つまり、教会はすべてで一つだということですし、そして互いにつながっているのです。私たちがいかに、遠く離れた、まだ見たこともない教会の人々ともつながっていることを思わないといけなさを思います。アフガン人で苦しみを受けている人々。北朝鮮の人々。イランの地下教会で、福音の広がりのために労している人々。アフリカにいる兄弟たち、すべての教会です。

#### 2B 分裂とつまずきをもたらす者たち 17-20

<sup>17</sup> 兄弟たち、私はあなたがたに勧めます。あなたがたの学んだ教えに背いて、分裂とつまずきをもたらす者たちを警戒しなさい。彼らから遠ざかりなさい。

これまで、パウロが宣べ伝える福音にあって、私たちが一つになっているところを見ましたが、そこで福音を受け入れていない者たちが教会に忍び込んでいることを警告する勧めをしています。私たちが共に使徒たちの教え、すなわち新約聖書の教えを聞いて一つになり、そこに愛と労苦における結びつきがあるのに、そうではない異質なものを持って来て、私たちを分裂させて、躓きを置こうとします。

パウロは、第一に「警戒しなさい」と言いました。しっかりと見張っていなさい、ということです。第

二に、「彼らから遠ざかりなさい。」と言いました。彼らを攻撃して、彼らと対抗しなさい、または、対話しなさいとも言っていません。多くの人が、ここで何らかの対応をしようとしてしまいます。けれども、悪に対しては遠ざかることが必要です。ここは、私たちが愛の労苦による結びつきがあれば、自ずと見分けることができるものです。そこで、人間的な愛情でそのような人々とならなければいけないと思わなくてよいのです。その理由を次にパウロは書いています。

<sup>18</sup> そのような者たちは、私たちの主キリストにではなく、自分の欲望に仕えているのです。彼らは、滑らかなことば、へつらいのことばをもって純朴な人たちの心をだましています。

このような人が、教会の活動に参加しようとするのは、自分たちのところに人を引き寄せたいからです。自分の分派を作りたいのです。自分の利益のために、教会の人々を利用しようとします。そして彼らの特徴は、「滑らかなことば、へつらいのことば」です。一見、すばらしい霊的なことを話します。それゆえ、純朴な人、警戒心を持っていない人たちは、だまされてしまいます。それで、私たちはそういった人々を警戒する必要があるのです。

<sup>19</sup> あなたがたの従順は皆の耳に届いています。ですから、私はあなたがたのことを喜んでいますが、なお私が願うのは、あなたがたが善にはさとく、悪にはうとくあることです。

パウロは、ローマの人々が自分たちで対処できるという確信がありました。だから、基本的にそういった人々から彼らは遠ざかってくれるだろうと安心してしています。ただ、一つだけ勧めをしています。「あなたがたが善にはさとく、悪にはうとくある」ということです。悪いものについて、私たちはとかく好奇心を持ってしまいます。偽りの教えがあると、一体これはどうなのか？と興味を持ってしまふのです。ある程度の知識は必要でしょう。けれども、人の徳を高めること、キリストの教え、クリスチャンとしての歩み、こうしたことに真っ先に目を留めてほしいと、パウロは勧めているのです。

<sup>20</sup> 平和の神は、速やかに、あなたがたの足の下でサタンを踏み砕いてくださいます。どうか、私たちの主イエスの恵みが、あなたがたとともにありますように。

パウロは今、悪にはうとくありなさい、と言ったので、これらの悪を神が根絶してくださる約束を話しています。自分たちに分裂やつまずきを引き起こすような悪は、神が打ち滅ぼして下さり、平和をもたらして下さいます。「あなたがたの足でサタンを踏み砕いてくださいます。」とありますが、これは、創世記 3 章 15 節において、主が蛇に語られたことばです。女の子孫、つまりキリストがおまえの子孫、つまり反キリストの頭を踏みくだいてください。したがって、これら悪については主が必ず滅ぼして下さるから、あなたがたは忍耐しなさいと勧めているのです。



### 3A 宣教仲間からのあいさつ 21-27

今、パウロは祝祷をしました。「どうか、私たちの主イエスの恵みが、あなたがたとともにありますように。」と言いました。けれども、まだ語り足りないあいさつがありました。それは、手紙を受け取る相手ではなく、パウロと共にいる宣教の仲間からのあいさつです。

#### 1B コリントにいる人々 21-24

<sup>21</sup> 私の同労者テモテ、また私の同胞、ルキオとヤソンとソシパテロが、あなたがたによろしくとっています。

初めに、テモテがあいさつをしています。パウロは「私の同労者」と言っていますが、他の箇所では「私の子」とも言っています。テモテこそ、パウロのかたわらにずっといた人であり、第二テモテを見ますと、彼が殺される最後まで彼と共にいた人だと分かります。ピリピ人への手紙で、パウロは、「2:20 テモテのように私と同じ心になって、真実にあなたがたのことを心配している者は、だれもいません。」と言いました。

そして「ルキオ」という名前は、使徒の働き 13 章のアンティオキアにある教会の指導者「クレネ人ルキオ」と同一人物かもしれません。この二つは同一人物かもしれません。「ヤソン」は、使徒の働き 17 章に出てくる人物です。彼はテサロニケにいて信者となりましたが、彼はパウロたちを自分の家に招いたようです。そのときユダヤ人が暴動を起こして、ヤソンの家を襲い、町の役人のところに引っ張り出して来ました。このような迫害を受けた兄弟が、今、パウロのそばにいます。さらに「ソシパテロ」は、使徒行伝 20 章 4 節に現われるベレア人ソパテロと同一人物かもしれません。

<sup>22</sup> この手紙を筆記した私テルティオも、主にあつてあなたがたにごあいさつ申し上げます。

口述筆記をしている筆記者があいさつしています。ローマ人への手紙は、他の手紙と同じように、口で話すことばを筆記させることによって、記されています。ガラテヤ人への手紙には、「6:11 ご覧なさい。こんな大きな字で、私はあなたに自分の手で書いています。」とあります。彼はおそらくは、目がよく見えなかったと思われます。それで筆記者に書かせていたと思われます。

<sup>23</sup> 私と教会全体の家主であるガイオも、あなたがたによろしくとっています。市の会計係エラストと兄弟クアルトもよろしくとっています。

「ガイオ」の名前は、コリント人への第一の手紙 1 章に現れます。パウロは、クリスポとガイオのほか、バプテスマをさずけたことがない、と言っています。このガイオの家にパウロは泊まっていたようです。「教会全体の家主」と言っていますから、いくつかある家を教会のために開放していたのかもしれません。コリントにおいて有力人物だったと考えられます。同じく「エラスト」はコリントの市

の収入役です。彼の名前は、今でも、コリントの遺跡に記されているのを見ることができます。彼は使徒行伝 19 章 22 節とテモテへの第二の手紙 4 章 20 節にも、パウロの一行の一人として登場します。ガイオもエラストも有力人物でありながら、自分の財産を主のためにささげてパウロと旅をした人々でありました。

## 2B 頌栄 25-27

パウロはついに、手紙を負えます。頌栄で終えています。頌栄とは、神をほめたたえ、また祈る言葉です。

<sup>25</sup>[私の福音、すなわち、イエス・キリストを伝える宣教によって、また、世々にわたって隠されていた奥義の啓示によって— <sup>26</sup> 永遠の神の命令にしたがい、預言者たちの書を通して今や明らかにされ、すべての異邦人に信仰の従順をもたらすために知らされた奥義の啓示によって、あなたがたを強くすることができる方、<sup>27</sup> 知恵に富む唯一の神に、イエス・キリストによって、栄光がとこしえまでありますように。アーメン。]

これまでローマ人への手紙で学んだ、彼の宣べ伝えた福音、その教えが、凝縮されたような内容です。パウロはまず、「私の福音、すなわち、イエス・キリストを伝える宣教」と言っています。主がパウロに啓示してくださった真理を、パウロは人々に宣べ伝えました。そして、この福音は、「奥義の啓示」であると言っています。奥義とは、パウロがここで言っているように「世々にわたって隠されていた」ものです。それは、「永遠の神の命令」です。世々に渡って立てておられるご計画であり、今、現わされたものです。その命令にパウロは従っていました。そして、預言者たちは、神の命令に従って、将来に起こることについて語りました。預言者たち自身も、その意味するところは理解することができなかったのですが、とくかく、語りなさいと主が命じられたことを語ったのです。

何をもって奥義なのかと言いますと、「すべての異邦人に信仰の従順をもたらすため」の真理でした。律法の行ないではなく、信仰によって義と認められること。そして、ユダヤ人だけではなく異邦人もその救いにあずかることができること。これらは、預言者たちによって語られていました。けれども、理解できなかったのです。今、このパウロに主がこの真理を悟らせてくださり、福音をくまなく世界中に宣べ伝えました。そしてパウロは、この奥義の啓示によって、「あなたがたを強くすることができる」と言っています。困難があってもそれでも耐え忍ぶ力を持っています。

そして最後にパウロは、「知恵に富む唯一の神」と言っています。この奥義は実に知恵に富んでいます。パウロも、イスラエルの選びと、異邦人への神のあわれみについて語っているとき、神の知恵と知識は、なんと富んでいることなのでしょうかと、言いました。やはり、神の国に異邦人も加えられていて、キリストにあって異邦人とユダヤ人が一つになっているということが、とてつもない大きな神の知恵と知識であるとみなしていました。一つになっていることに大切さです。